

人は、どのような背景をもって物事に反応したり、判断するのだろうか。筆者は、長い間いろいろな人やグループを観察した結果、「OS」というコンピュータ用語を使って、その背景にあるものを整理すると有効ではないかとの結論に達した。本資料は、OS理論を始めて紹介した1999年の大野キリスト教会の教育セミナーにおける講演原稿を一部修正、加筆したものである(2013年10月)。

OS理論による人間分析と信仰

その人らしさを受け入れ、補い合っていく人間関係を構築するために

ごあいさつ

今年度の教育セミナーにお招きいただき、大変光栄に思っております。

この講演では、「どのようにしたら良い人間関係を築くことができるのか」、そんな問題をご一緒に考えたいと思います。この講演を聞いて、親子、夫婦、家族の関係が、あるいはご近所の方々や職場、そして教会の中での付き合いが、少しでもスムーズになったならばいいなあ、と思っております。そうなるよう祈りつつ、講演させていただきます。期待をもってお聞きください。

1. 人間関係がうまくいかない理由

最近のカウンセリングの世界では、良い人間関係を築くためには適度な距離を保つことが重要であると言われています。いわゆる、「バウンダリー(境界線)の問題」です。確かに人間関係は、自分と相手(それは子ども、親、友人、職場の人など誰でも)との距離を適切に保つことがとても大切です。

しかし、良い人間関係を築くには、バウンダリーの問題を学ぶだけでは不十分です。相手の人を、あるいは自分のことを、よく知ることが不可欠です。双方が、それぞれ自分の姿や置かれている状況をよく理解しないと、適度な距離がどれぐらいかということが分からないからです。

私たちは、毎日たくさんの悩みにぶつかります。悩みには、病気、家族、仕事、恋愛、経済、教会のこと、その他いろいろなことがあります。そのような悩みは大抵、人間関係の問題が絡んでいます。どうしてもあの人とはうまくいかない。ぶつかってしまう。面と向かうと緊張してしまいます。うまくしゃべれない。できれば避けたい。関わりたくない。面倒くさい。顔を見るのも口をきくのも嫌になってしまう。・・・ほとんどの人は、そんな悩みをもっています。

人間関係をよくするには、自分と相手をよく知ることが大切です。ところが、多くの人は、自分のことも相手のこともよく分かっていると思い込んでいます。自分の子どもなのだから、親なのだから、友人なのだから、長い時間一緒に働いているのだから、と。そのため、トラブルが起こると、「えっ、どうして」ということになります。あるいは、自分たちの間には何の問題もないと思っても、本当はどちらかが我慢しているだけというケースも、少なくありません。その我慢は永久に続くわけではないので、思いがけない時に爆発することが起こります。

普通、人は相手も自分と同じように考え、感じるものだと思います。相手のことが見えない人は、大抵自分のこともよく分かっていないものです。「男性にとって女性は永遠に不可解な存在である」と述べた哲学者がいますが、男性と女性の間に限られません。他の人は皆、自分にとって不可解な存在だという前提で接した方がよいのです。何となく甘えの構造ができてしまうのは、人間の弱さなのでしょう。

皆さんも、人ってどうしてこんなに違うのだろう、と思われたことがあるでしょう。ある人は、血液型で説明してくれます。私は、B型なので、何となく当たっているなあと感じることがあります。でも、反対に感じている人もおられるでしょう。血液型による性格分析は、科学的には何の根拠もないようです。それでも結構はまる人が後を絶ちません。それなりに有効な部分もあるからでしょう。たとえ一部当たっているととしても、血液型では結局4種類にしか分類できないのですから、大雑把すぎることは間違いありません。

2. 人の性格を分類する

では、他に説明法はないでしょうか。あります。人間の性格分析です。たくさんの心理学者がこの分野で活躍

しています。中でも、ドイツの精神科医エルンスト・クレッチマー(1884-1964年)による6つの分類法が特に有名です。簡単に紹介しておきましょう。

①神経質タイプ(N型)―感受性が鋭く、自分の内外で起こった変化を敏感に感じとる。一般的に知性の高い人が多い。自分の内面を常に気にする傾向が強く、内省過剰に陥りやすい。必要以上に感じとったことを気にし過ぎ、不安定な状態になりやすい。消極的で弱気になりやすく、なかなか自分の力を発揮出来ない。対人関係においては、攻撃的になることは少なく、多くの人から信頼されるタイプ。

②粘着質タイプ(E型)―几帳面で礼儀正しく義理がたい。着実に手堅く、非常識な面を見せない。忍耐強い性格だが、ストレスを内側に溜め込みやすい。その我慢が一定レベルを超えると、物凄い怒り方を見せることがある。非常に頑固な面を持ち、自分の意志を曲げようとしめない。間違えると独裁者になりうる素質をもっている。一度手がけた仕事については、地道な努力で最後まで粘り強くやり通す。その反面、手際が悪く感じられることもある。対人関係では信頼されるが、面白みに欠けるタイプ。

③顕示質タイプ(H型)―わがままで勝気、嫉妬深く、見栄っぱり。我慢するというより、外側に発散することを好む。華やかで賑やかな雰囲気を持ち社交的。常に人々の中心にいたいとの願望が強い。話題も豊富で広い知識を持っている。流行に敏感で、全体的に知的で利口そう。話題の中心にいることを好み、自慢話が多い。会話の主語に「私」を多用する。他人に好かれ、尊敬されることに価値を置いている。自分が無視されることを嫌い、常に自分の方に話を持っていこうとする。人の好き嫌いが激しい。社交的で、一見他人に親切であるように見える。しかし、打算的であるため、日が経つにつれ友人も離れて行くことが多い。子どもっぽい性格で、大人になりきれない未成熟なタイプ。

④偏執質タイプ(P型)―固い信念と強い自信をもっている。自己中心的な性格が強い。高度な知性と広い識見を持ち合わせ、有能で、決断力があり、逆境をものもしないリーダーに多い。傲慢で専制的、横柄で向こう見ずのところがあり、他人から敬遠されやすい。積極的な行動力が持ち味なのだが、自分に都合の良い方向に突っ走る傾向が強い。対人関係では、攻撃的で他人の気持ちを汲み取ることができない。デリケートな感覚からは程遠いタイプ。

⑤分裂質タイプ(S型)―物静かで非社交的、真面目だがユーモアがない。デリケートな性格で通俗的な物事を軽蔑し、自分だけの世界を作り上げ、それに熱中しやすい。文学、美術等の芸術面に才能を発揮することが多い。洗練された上品なセンスと冷酷さを持ち合わせている。粗野で下品なことに対しては、極端に嫌悪感を示す。観察力と分析力にすぐれ、物事を理路整然と考える。有能な才能を持ち合わせていれば、ナンバー2で力を発揮する。対人関係においては好き嫌いが激しい。自分の世界観・価値観がわかりそうな人には特別興味を示す。第一印象で嫌なイメージをもった相手には全く興味を示さないタイプ。

⑥循環質タイプ(Z型)―社交的で善良、親切であたたかみがある。気分が高揚しているときはユーモアがあり活発に行動する。その反動からか周期的に沈み込む時期がある。思考には一貫性が見られず、軽率あるいは思慮が浅いと見られることもある。ユーモアに富んだ性格で人に好かれやすい。人の間に入って潤滑的な役割をはたすことも多い。理解は敏速で、自己過信さえしなければ、最も成功しやすいタイプ。

以上のような性格分析をご覧になって、皆さんはどのように思われるでしょうか。ご自分は、どのタイプに属するとお考えになりますか？ 皆さんと一番親しい方は、いかがでしょう？ 自分が苦手だと思っている人がいる場合、その人はどのタイプでしょうか？

人の性格分析は、意外と難しいものです。自分のことでも、他人のことでも、どのタイプに振り分けるのかと聞かれると、なかなかうまくいきませんね。このタイプのある部分と、別のタイプのある部分を併せ持っている、というのが普通ではないでしょうか。人の性格は、今流に言えばまさに「複雑系」ということになるのでしょう。

3.4つの気質の分類法について

皆さんは、人間の気質を4つのタイプに分類する方法について聞いたことがあるでしょうか。かなり以前のことですが、その分類法を自分の家族(家内と、男の子と女の子と私)に当てはめ、これは結構有効かな、と思ったことがあります。この分野の専門家によると、科学的・学問的にはそれほどの信頼性はないようですが…。その評価は皆様にお委ねすることにして、とにかく紹介しておきましょう。

人間の気質には、胆汁質、憂鬱質、多血質、粘液質の4つがある。胆汁質は現実を変えようとし、憂鬱質は現実から逃げようとする。多血質は現実を楽しもうとし、粘液質は現実に適応しようとするという傾向がある。

ワンマン社長は胆汁質タイプ、優秀な補佐役の副社長は粘液質。粘液質は基本的に「ノー」とは言わない。いつでも与えられた条件下で何とかしようとする。憂鬱質や多血質では胆汁質の補佐は務まらない。多血質は胆汁質の側では機嫌を取ろうとする。憂鬱質は胆汁質の側では自分を抑制しなければならず、ストレスを感じる。それに憂鬱質は胆汁質を怖がる。

粘液質は胆汁質とはぶつからない。粘液質は胆汁質に「ノー」とは言わない。ただし、我慢して服従しているわけではない。我慢して胆汁質の言うことを聞いてしまうのは憂鬱質。粘液質は、意見を求められると、胆汁質が不快に感じるようなことでも平気で言う。ただし、意見を求められない限り何も言わない。粘液質は、胆汁質が唯一「手に負えない相手」である。胆汁質にとっては、多血質は手に負えない。粘液質に手に負えないのは多血質。憂鬱質は多血質や胆汁質には手に負えない。

胆汁質は思い通りにならないとすぐに腹を立てる。粘液質は、何かを思い通りにしよう等とは考えない。でも、腹が立っている胆汁質は、腹を立てない粘液質を見て腹を立てる。胆汁質は粘液質の側にいると自分が子どもっぽく感じる。その鈍重さに腹を立てながらも、一番信頼もしている。粘液質には胆汁質のような奇抜なアイデアや行動力はない。強いオーラも華やかさも無い。胆汁質が舞台に立つと人目を引きつける。粘液質が舞台に立っても、裏方かなと思われるだけである。

「色」の好みは気質と強く関係している。胆汁質は赤や紫などの、自己主張の強い色の服装を選ぶ。粘液質は緑やベージュのような目立たないものを選ぶ。胆汁質は赤や紫の服を着ても、色に負けることはない。粘液質が赤や紫の服を着ると、色に負けてしまう。多血質はピンクや黄色や薄緑や水色などのような明るく軽い色を好む。憂鬱質は青や黒という、精神性を感じるような深い色を好む。粘液質は、わび・さびなどを感じるような渋い色を好む。

胆汁質は独創的であることを好む。人がやらないことをやりたがる。粘液質はノンビリ型が基本で、現実対応がうまい。必要に迫られれば独創的にも考えるが、基本的には独創的であることに価値を感じない。従って芸術家には向かない。どちらかというと「職人」や「裏方」向きである。粘液質は、リズム感が悪い。演歌のようにゆったりと流れるメロディーは好んでも、リズムに乗って歌ったり、踊ったりが出来ない。それが得意なのは、深く物事を考えない多血質である。

いかがでしょうか。皆さんの周りの方々の中で、4つのタイプに当てはまる典型的な人を想定し、上記の文章一つ一つを当てはめながら検証してみると面白いかもしれません。結構当てはまるって納得するなら、それなりに有効といえるでしょう。ほとんど当てはまらないとすれば、切り捨てればよい、それだけのことです。

このような4つの気質分類理論には、「こういう事柄をもつ人をAと分類する。そして、Aに分類される人にはこういう事柄がある」という「言葉の罣(これをトトロロジーという)」があります。従って、すべてを信用するわけにはいかないのですが、4つの気質の相互関係の洞察や、色の好みを発展させていく応用部分などについては、思わぬヒントが隠されているようにも思います。ゲーム感覚で楽しんでみたらよいのではないのでしょうか。

4. OS理論に到達するまで

人の性格や気質を分析してグループ分けすることは、とても興味深いことです。しかし、あまりうまく当てはまらないケースが多すぎる、そんな風に思われる方も多いのではないのでしょうか。血液型でも、性格分析でも、気質による分類でも、皆それぞれ役立つところはあるでしょう。しかし、何かしっくりこないところがつきまとうのも事実です。それだけ人間は複雑なのでしょう。人間関係をよくするために、もう少し何か役立つ人間理解の方法はないのでしょうか。そんなことをずっと考えていたある時、ふと「OS理論」という考えが浮かびました。

1990年代初め、私は聖契神学校で「牧会学」のクラスを担当することになりました。それまで私は、旧約聖書を20年近く教えてきましたが、牧会学は初めてです。旧約聖書のクラスでは、よく牧会漫談や牧会裏話をしていたとはいえ、「えっ、なぜ私が」と最初は戸惑いました。しかし、逃げるわけにはいきませんでした。

牧師とは、牧師の仕事とは、いったい何なのだろうか。牧師になって25年以上もたっているのに、改めて考え

てみると、意外と難しい問いでした。教科書になりそうな書物をたくさん調べてみましたが、どの本を使っても、それで学生の皆さんがよき牧者になれるようにはとても思えませんでした。祈り、聖書を読み、神様の望んでおられる牧師像とはどのようなものなのだろうか、と考え続けました。そして、マタイ 25 章のイエスのタラントの例えを読んでいたとき、答えがひらめきました。

そうだ、人を励ますことだ。今教会に来ている方々が、やがて神様のみもとに出るとき、「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ」(マタイ 25:21、23)、そう言われるように、教会に集う人々を励まし続けることなのだ。イエス様は教会に人々を送ってくださっている。その方々はそれぞれ賜物を与えられている。その賜物が生かされ、まさにその人らしく神の国に仕え、天に宝を積むよう励ますことなのだ。

牧師は、どれだけよい説教をしても、カウンセリングに励んでも、教会運営に心砕いても、信徒の一人一人がイエス様から「よくやった」と言われるように育てない限り失敗なのだ、そう確信させられたのです。それから私は、会員一人一人のためによく祈るようになりました。祈りながら、いったい彼らがどのようになったら、神様から「よくやった」と言っていたいただけるのだろうか、そのことばかりを考えるようになりました。そして、教会に集う一人一人をじっくり観察するようになりました。

几帳面な人もいれば、ラフな人もいる。何でも積極的にやろうという人もいれば、どんなことに対してでも消極的な反応を示す人もいる。何でも賛成という人もいれば、何でも反対という人もいる。細かな計画を立てる人もいれば、行き当たりばったりの人もいる。慎重な人もいれば、大胆な人もいる。口八丁・手八丁という人もいれば、寡黙な人もいる。責任感の強い人もいれば、責任転嫁の上手な人もいる。石橋をたたいて渡る人もいれば、たたかないで渡る人もいる。たたいても渡らない人さえいる。常に希望的観測をする人もいれば、心配の種を探す人もいる。冒険大好きな人もいれば、失敗やリスクを避けることばかりを考える人もいる。働くことが趣味のような人もいれば、面倒なことには一切手を染めない人もいる。笑いの絶えない人もいれば、涙の乾かない人もいる。……

人は皆、その人らしさを持っているのだと分かりました。いったい、このような違いはどこから来るのだろうか。それが私の一番の疑問でした。そして、事あるごとに、その人の背景にあるものを探っていくようになりました。その人の家庭環境は？ 職場では？ 受けた教育は？ 今置かれている状況は？ などなど。

私の牧会している大野教会では、月に一度運営委員会が開かれます。それは、会員選挙によって選ばれた 10 人のメンバーによって構成されています。ところが、提案事項に対する受け止め方、理解の仕方、対応の仕方はそれぞれ皆まちまちです。しかも、メンバーそれぞれは、どのような議題であっても、大体同じようなレスポンスをする傾向のあることが分かりました。例えば、その傾向は職業によって特色づけられるように思います。

教師は物事ははっきりさせ、プロセスが重要。参加すること自体が大切で、反省会が大好き。公務員は規則が重要で、書類好き、なかなか融通がきかない。商売人は、儲かるかどうか重要で、結果よければすべてよし。動物的嗅覚というか、直観によって即断する。学者は情報集めが得意で、何でもシュミレーション、シュミレーション。お金の使い方にシビアなのはやっぱり主婦。理屈をいろいろ言わないと気が済まないのが学生さん。牧師にとって一番やりやすいのはサラリーマン。自分が関係するところは発言するが、後は牧師さんにお任せ、となる。同じサラリーマンでも、課長が部長に、部長が社長になると、発言内容が違ってくる。

こんなふうに言われると、皆さんはたぶん、抵抗を感じることでしょう。教師の人にもこう人がいる。商売人にも、公務員にも、サラリーマンにもいろいろな人がいる。こうだと決めつけるのは良くない、そうおっしゃることでしょう。その通りです。職業はその人のある部分を形成しますが、職業だけで、レスポンスの傾向が決まるわけではありません。その人の生い立ち、受けた教育、それまで出会ったさまざまな体験、その他いろいろなものがモザイク状に組み合わされ、その人らしさが造られます。その辺のところを明らかにするのが、「OS理論」なのです。

余談になりますが、この運営委員会で一番厄介なのは牧師(中澤と言うべきかもしれませんが)です。牧師は、提案されている議題の一つ一つに目を通し、よく祈ってから会議に臨みます。大抵は、祈りの内に、神様のみ心は分かります。すると、運営委員会に出ても、他人の意見をあまり真剣には聞いていません。自分と合う考えは良い意見、違っているとおかしい意見、そんな風にジャッジをしながら、最終的に自分が確信している方向にもっていかうとします。会議に参加してはいるものの、討議は一種のセレモニー、会議には懐疑的なのです。

この行事をどのように行うのか、誰がどのような役割を担当するか、どのように広報して動員をかけるか、今月は赤字会計だからどうしようか、あの備品を買うかどうか、講師に誰を招こうか、スケジュールをどう調整したらいいのか、実は、牧師にとってそういうことはどうでもいいのです。

牧師には、牧師しかできないことがあります。あの人はどうしたらイエス様を信じられるだろうか、あの人がバプテスマを受けない理由は何なのか、あの家族は、どうしたらこの危機を乗り越えられるだろうか、あのご夫婦は大丈夫だろうか、あの青年は結婚の意思をもっているのか、最近あの人は元気がないがどうしたのだろうか、あの人の病を癒してほしい、あのご家庭が円満になってほしい、・・・そんなことが、牧師の関心事なのです。

OS理論は、教会員の一人一人のものの受け止め方や応答の仕方を把握したいという思いから始めたものです。そのうち、個人だけではなく、いろいろな組織にも、その組織体としてのOSがあるのではないかと思うようになりました。というのは、同じ会合に何回か出る内に、その会合は大体いつも同じパターンで始まり、同じようなプロセスを経て、同じような終わり方をするに気づいたからです。一つの例だけ挙げておきましょう。

私たちの教派には、東京地区の牧師会という集いがあります。月一回で、場所は東京の練馬にある教会。30名ほどの牧師が四角に置かれた机を囲んで座ります。座席は全くの自由ですが、どういうわけか、それぞれの牧師たちの座るところはほぼ決まっています。始まりは朝の10時半で、終わりは午後の2時か3時ごろ。午前中の1時間は学びの時間。司会者はアイウエオ順の回り持ち。最初の30分ほどは、司会当番の牧師が何かの研究発表かブックレポートをします。その後30分ほどの出席者全員による質疑応答の時間です。

その質疑応答の時間が始まると、真っ先に口火を切るのは、そのレポーターの左側に座っている坂本先生。担当者がどのようなテーマを発表しても、まず鋭い批判的な意見を投入。すると、そこから時計回りで3時ぐらいの場所に座っている藤原先生がレポーターの話した趣旨を援護射撃。ここまでは、ほとんどいつも変わらないのですが、それからはレポートのテーマによって発言者が変わる。時にホットな論争が展開される。ただ、どんな論争になっても、肯定的にとらえる人、問題点を批判的につつく人、細かな欠点を指摘する人、提灯持ちの発言をする人、あまり関係のない話題を持ち出す人、自説を展開する人、場の雰囲気や和らげようとする人は決まっている。(皆牧師たちなので一応ジェントルマンではありますが)。かなり時間も過ぎ、議論が白熱して収束がつかなくなると、いよいよ牧師会のドン泉田先生の登場。これで不思議と議場が納得して一件落着となる。

長々と牧師会の様子をお伝えしたのは、一つのことを知っていただきたいからです。牧師会の流れを誰かが決めているわけではありません。にもかかわらず、ほとんどいつも、自然に上記のような流れになります。単に牧師会全体の流れだけでなく、一人一人の牧師の発言傾向も、ほぼいつでも同じです。

5. その人らしさを説明する「OS理論」とは

人間の性格や言動の特徴を表わすには、既に見たようにいろいろな方法があります。私自身は、人がさまざまな状況に対して示す反応を観察していたとき、その人らしさを表わす基になっているものを、コンピュータの「OS」に見立てて考えると分かりやすいのではないだろうか、と気づきました。では、この「OS理論」の中身をもう少し詳しく説明してみましょう。

OSとは、むろんコンピュータ用語で、operating system の略語です。コンピュータ上では、ウインドウズのOSやマックのOSなど、いろいろあります。コンピュータは、このOS上にいろいろなプログラムを走らせ仕事をします。この「OS」と、人間の「その人らしさ」を類比させて考えようというのが「OS理論」です。人はそれぞれ自分のOSを持っており、さまざまな状況に対し、そのOS上から反応するという理論です。

ちょっと似たようなことを、解剖学者の養老孟司氏が「一次関数($Y = aX$)」によって説明しています(『ばかの壁』30—40頁)。ある情報(X)は、ある人物(a)を通すと、別の答え(Y)が出てくる。情報は、客観的にいつも変わらないものではなく、人を介すると変化する、というのです。この一次関数という考え方も面白いのですが、OS理論の方が、媒介となる(a)という個人の部分により深く迫るので、より有効かなと思っています。つまり、OSの方が、①人間の行動を歴史的に遡り、社会的な広がりを含めて総合的にとらえることができる、②現代の脳科学が提起している問題を十分考慮することができると同時に、それを社会的な環境という文脈に置いて考えることができる、③現代人に親しまれたコンピュータ用語なので、数式よりフレッシュな感覚で捉えることができる、④問題をさまざまな方向に発展させ、議論や認識を豊かに膨らませることができる、などの利点があります。

なお、皆さんの中には、このようなモデルを持ち出し、類比的に論ずること自体に違和感を覚える人もおられるでしょう。そういう方は、無理に使う必要はありません。まあ、この種の考え方は学問的というより、ゲーム理論的なものなので、役立てば結構、役立たなければ捨てたらよい、といった程度のお話です。

では、その人らしさを生み出しているものを明らかにする「OS理論」を説明いたしましょう。

まず中心に、人間の根底的な要素として次の三つのものを想定します。それは、DNA で分かるもの、脳科学で明らかにされているもの、精神分析によって分かるものです。ある程度生物学的に追求できる「脳作用的なもの」ともいえるでしょう。現代科学でいう「人間の意識」にかなり近いものと考えていただいてもよいと思います。

この人間にとって中心的な脳作用は、誕生以来さまざまな影響を受けて成長発展していきます。このさまざまな影響を、四つの領域に分類して考えるのが「OS理論」です。その領域とは、成育歴、教養歴、社会性、偶発性の四つです。

①まず、成育歴です。この中には、例えば次のような事柄が含まれます。

- 胎児、あるいは乳幼児のときに、必要な保護、愛情を周囲の人々から受けたか
- 幼児のための手話言語で会話をしながら育てられたか
- 3歳ぐらいまでに、人間としての基本的な在り方を身につけ、健全な自我が形成され始めたか
- 幼稚園、保育園時代によき社会性を身につけることができたか
- 6歳ぐらいまでに、人間として自立するのに必要な事項を体験的に学びえたか
- 小学生時代に両親から十分に愛情を受けることができたか
- 12歳ぐらいまでに、自分の興味や関心を伸ばすことができたか
- 少年時代、少女時代に健全な反抗期を過ごし、物事を肯定的に受け止める環境に置かれていたか
- 青年時代に社会に対して正しい関係をもつ訓練を受けることができたか

②次に、教養歴です。これには、例えば次のような事柄が含まれます。

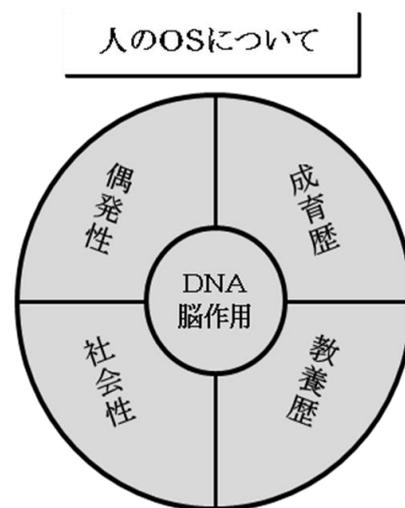
- 基本的な言語能力、論理力、コミュニケーションなどを身につけたか
- さまざまな分野におけるスタンダードな基礎知識を身につけることができたか
- どのような学校教育を受けたか
- 与えられたデータに対する分析力や総合力を身につけたか
- 批判的な精神と肯定的な精神とをバランスよく身につけたか
- どのような人間観、価値観、歴史観、世界観、哲学的・宗教的な教養を身につけたか
- 目指すべき(あるいは手本になるような)教師や理想的な人物に出会えたか
- 物事を科学的な思考で処理する能力を身につけることができたか
- 一般の教養的な知識において、自信を持てるようになっているか
- 外国語教育を学ぶ機会があり、自信をもっているか

③三番目に、社会性です。これには、例えば次のような事柄が含まれます。

- 男性なのか、女性なのか
- どのような民族的背景を持っているのか
- どのような時代の中で生きているのか
- どのような職業に従事しているか、職場での環境は
- そのほかの場所で、社会性を身につけるような機会があったか
- どのような人々に囲まれながら社会生活を送っているか

④最後に偶発性です。これには、例えば次のような事柄が含まれます。

- そのときの部屋の状況はどうか(日射、温度、風、空気など)
- その日の健康はどうか(睡眠、空腹、緊張)
- その状況における自分の立場はどうか
- 使命感、必要感などを感じることができるか
- どのような利益を得られると計算するのか(名誉、充足感、高い評価)
- 自分にとってのサポーターがいるか
- 最終的な決着の見通しをどの辺において判断するのか
- 自分の対応によって自分の評価はどう変わると判断するのか



それぞれの四つの領域の中に出てくる一つ一つの要素が、その人のOS形成にどのような影響を及ぼすのかということは、OS理論の最も興味深い事柄です。今日は時間の関係もあり、そのような細かな点にまでは踏み込めません。皆さんがお家に帰られ、ゆっくり考えていただく時間をとっていただければ嬉しく思います。

6. 人間のOS形成に信仰は大きく貢献する

これまで、信仰について直接ふれることなく「OS理論」を解説してきました。最後に、信仰がこのOS理論にどう関わるのかという点をお話したいと思います。私がこのOS理論を考えついたのは、教会の方々がやがて神の御前に出たとき、「よくやった」と言われるためにはどうしたらよいか、という問題意識からでした。従ってここからが本番というところなのですが、簡単にふれるだけで終わらざるを得ないことをお許しいただきたいと思います。

人は、自分の過去の成育歴や教養歴、あるいは社会性などを変えることはできません。従って、一般の人がこのようなOS理論を聞くと、自分の生い立ちや過去の苦い体験を思い出し、親や周囲の人々を責めたり、恨んだり、怒ったりする気持ちになるかもしれません。それは、キリストの贖いを知らずして最初の人間の墮落事件を聞かされるようなものです。あるいは、キリストが神の右の座に王として座しているのを見ることなく、この世はサタンの支配下にあると教えられるようなものです。そこには、絶望があるだけです。

しかし、神を信じるキリスト者は、全く違った見方で自分の過去を振り返ることができます。かのヨセフの生涯を思い出してください。そのヨセフは、自分を外国人に売り飛ばした兄弟たちに向かって「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました」(創世記 50:20)とすることができました。多くのキリスト者が、「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ 8:28)という御言葉を、自分の歩みの拠り所として歩んでいます。

キリスト者は、神が摂理の御手をもってこれまで自分を導いてくださったことを信じています。どのような立場に生まれ、育ったとしても、自分の過去について、誰かを恨むようなことはしません。神が、今の自分を一番ふさわしい場所に置いてくださったからです。それはたとえ、私が自由意思を働かせ、罪を犯したり、間違った道を選び取った結果であるとしても、変わりません。キリスト者になってからの失敗であっても、同じです。私たちはありのままの姿で御前に出るなら、神の赦しと恵みは溢れるばかりに覆うでしょう。他の人のことなど一切気にする必要はありません。私たちが神から受ける恵みは、何と驚くべきものでしょう。

世界中のクリスチャンが、「アメイジング・グレイス」の賛美に涙することは、当然のことなのです。

神を信じる人々は、過去を悔やむことも、過去を誇ることもしません。そういうこと一切から卒業します。旧約聖書の人物、アブラハム、ヤコブ、モーセ、ダビデ、ソロモンなどの歩みをご覧ください。皆多くの欠点を持ち、失敗を繰り返しながらの歩みでした。神はそれぞれの足りないところをカバーされ、神の働きに用いられたのです。パウロは、自分が過去に誇っていたものを「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくと思っています」(ピリピ 3:8)と告白しています。

イエスに出会った人たちは、決していわゆるエリートと言われる人々ではありませんでした(Ⅰコリント 1:26-30)。彼らは、漁師や取税人、政治的活動家やローマの兵士たち、女性や子どもたち(当時は一人前とは見なされなかった)、まさに社会からは後ろ指を指されるような人々でした。イエスを知らないと言ってしまったペテロに対し、イエスは何と優しい、励ましの言葉をかけてくださったことでしょうか(ヨハネ 21:15-19)。

キリスト者のOSは、信仰もつ前のOSとは明らかに違います。キリスト者とは、「真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着た」人々だからです(エペソ 4:24)。パウロは、その「新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至る」と述べています(コロサイ 3:10)。「大事なものは新しい創造です」(ガラテヤ 6:15)。そうです。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」(Ⅱコリント 5:17)。

OS理論で言えば、新しく造られるとは、その人の内側の一番奥深くに聖霊が内住される、ということです。私たちは誰も、自分が遺伝的に引き継いだもの(DNA)や心や人格として作用する脳作用のメカニズム(自意識などを含む)を変えることはできません。しかし、聖霊ご自身がその人の「いのちの御霊の原理」(ローマ 8:2)として働き、その人を新しく造り替えてくださるのです(Ⅱコリント 3:18)。

人は、キリストを信じる時永遠のいのちを受けます(ヨハネ 3:15-16、5:24、6:47、ローマ 6:23 など)。永遠のいのちとは、「いのち」である限り、永遠に生きているはずですが。そのようなものは、「神のいのち」以外にありません。

つまり、神の御霊のことなので。パウロは、「御霊」は「キリストの御霊」であり、さらに「キリスト」であると述べています(ローマ 8:9-10)。そして、御霊を永遠のいのちに結びつけています(ガラテヤ 6:8)。キリスト者は、御霊によって歩むのです(ガラテヤ 5:16)。また、「御霊に満たされ」(エペソ 5:18)、御霊の実を結んでいくのです(ガラテヤ 5:22-23)。御霊ご自身が、弱い私たちを助け、とりなしてくださるのです(ローマ 8:26-27)。

キリスト者は、御霊によって「造り主のかたちに似せられた」者で(コロサイ 3:10)、「神にかたどり造り出された」(エペソ 4:24)者です。それは、人間が創造された時の「神のかたち」が回復された、ということを示唆します。その「神のかたち」こそ、被造物を管理できる能力に他なりません(創世記 1:26-28、詩篇 8:3-9)。キリスト者とは、神が最初に期待された、本来の人間に戻った、ということなのです。御霊がキリスト者の内に働かれる目的は、神が相続財産としてキリスト者に備えられた被造物のすべてを治めさせるためだったのです。

キリスト者にとって最も素晴らしいことは、教会という「神の家族」(ガラテヤ 6:10、エペソ 2:19、3:15)をもっていることです。教会とは、「同じ神を父と仰ぐ神の子たちの集まり」です。兄弟・姉妹とは、単なる呼びかけのタイトルではなく、同じ命を分け合った者たちにしか意味を持たない言葉です。他のどこにも見られない、特別な関係なのです。一緒に喜び一緒に悲しむ、一緒に笑い一緒に泣く、安否・健康・経済・仕事・行く末、その他どんなことでも気にし合う関係です。家族である限り、本当に幸せになってもらいたい、そういう思いを心底から分かち合っているのが教会です。

その成育歴や教養歴、あるいは社会性において、地上の家族関係では満たされなかった方々は教会の中にたくさんいます。しかし、失望するには及びません。キリスト者は皆、教会という素晴らしい霊的家族を持っているからです。教会というところは、実に不思議な場所です。世界中に、教会のような共同体はありません。それは、神の家族です。その神の家族こそ、キリスト者のOS形成にとって不十分だったものを補ってくれる働きをします。

私は、教会の中で生まれた赤ちゃんたちをととても幸せに思います。教会の方々は皆、自分の子どもであるかのように祈り、愛の手を伸ばしています。教会の中で葛藤しながら一生懸命生きている中学生や高校生、青年たちがいます。教会の多くの方々は、本当の親や兄弟より彼らのことを心にかけて、祈っています。世間では、異業種間の交流ということが叫ばれています。しかし教会の中では、職業、学歴、社会的な立場、経済状況、その他あらゆることを超えた、親しい交流が見られます。ゴルフの仲間、囲碁の仲間、旅行の仲間、勉強の仲間、コーラスの仲間、おしゃべりの仲間、趣味やスポーツの仲間など、喜びを共にできる仲間たちであふれています。教会に来るのが楽しくてしょうがない。毎日でも教会に来ていたい、そういう人がほとんどです。

教会こそ最高の人生を送らせてくれる場所です。最高の知識を与えてくれます。切磋琢磨して、人間として成長させてくれます。心開いて、信頼しきっても、裏切られない仲間たちです。皆、本音で生きています。違いがないとか、意見がぶつからないというわけではありません。甘えた関係や、べたべたした関係ではありません。

私たちの教会には、110歳まで生きて神様に仕えようというグループがあります。正会員は100歳以上で、今のところ、正規のメンバーは1人です。80歳以上でないと、準会員にさえなれません。皆、墓場の向こうまで一緒に誓い合った家族です。

私たちの教会に集っている人たちは皆大きな声で叫んでいます。「家族に乾杯！」と。

そして、皆で歌います。「私たちは一つ」と。

結論

私たちはここまで、OS理論をもとに、その人らしさを考えてきました。キリスト信仰が、そのOS理論にどのような貢献をするのか、という点も探ってきました。しかし、本当を言えば「OS理論」などという考え方はどうでもいいのです。自分や周囲の人を理解するのに役立つようだったら使ってみてください。あまり意味がないと思われたら、すべてを捨ててください。それだけの話です。

一番重要なことは、神がお造りになり、贖われたキリスト者のお一人一人が、本当に幸せになることです。幸せな生涯を送り、やがての日に、神様から「よくやった」と、お褒めの言葉を語りかけられることです。このことは、どんな方にも当てはまります。例外はありません。あなたは今、神様にあって「本当に幸せです」と言い切ることができるでしょうか。「我が人生に悔いなし」と断言できるでしょうか。

もしそう言えないとしたら、さあここから、キリストにある素晴らしい人生を再スタートさせようではありませんか。